Lesson 219　発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

主体的・対話的で深い学び合いへの挑戦

松田 道雄

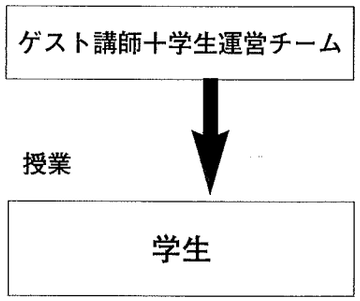
提案：社会教育が、学習者の「主体的・対話的で深い学び」を支援する試みの実践をお互いに共有しませんか？

新たに社会教育現場担当者もメンバーに入ってもらいながら、「発想する！授業」というタイトルで長く本誌のこの連載を担当させていただいております。筆者は現在63歳です。現在の仕事（大学教員）も退職までの年月を意識する歳になっています。「いつまでもあると思うな、○○」は、私たちの人生も含めて、あらゆる物事は有限であり、だからこそ今のことに感謝と最善を尽くす心持ちを持つことを教えてくれます。そのことを、筆者は現在、これから社会人になるために若い世代が学んでいる大学の授業で想い、残りの授業回数をできるだけまだ試みたことのない実践に挑戦する「発想する！授業（教育活動）」を行おうという気持ちが強くなっています。年長者がそのような気持ちで行動すること自体が若い世代には「後ろ姿で見せる教育」になるのではないかとも思っているのですが…。本号では、その試みの一つを読者皆様に報告します。

また、筆者自身、シニア世代の一人としては主たる仕事を退職した後に何をしたらいいのか、そのために何を学べばいいのか、どんな学習方法がその後の人生の幸せ感を醸成するために求められるのかなどについては、また別の機会に筆者のささやかな実践経過（週末の朝に試み、近所の方から喜ばれている活動です）を報告したいと思います。人類の歴史上初めての人生100年長寿社会に向けては、人生の前半の学校教育だけでなく、人生の後半には何を学び、どう生きるかが重要な生涯学習課題になってきています。高齢の現職アメリカ大統領が周囲の意見に押されて再選立候補を断念し、「新たな若い世代に引き継ぐ」と演説したことは、長寿化する人類社会がどうあったらいいのかを考える時期になっていることを象徴しています。シニア世代のための「発想する！学習」はまた別の機会にして、筆者の現役世代後半の今回の「発想！」に話を戻します。

先に、今回紹介する大学の授業の試みで、受講した学生がどんな学びを得たのか（学習成果）、授業後の学生コメント一部を提示します（**資料1**）。学生には大いに「学びがい」のある授業になったように筆者も感じられ、筆者自身「もっと早くにこのような方法に気づいて行えば、もっと学生のためにもなったかな」と思っているところです。では、どのような授業を行ったのか？　通常の授業は授業担当者が教育内容を講義し、授業の進行も行う形式です。その中で学生どうしで話し合う場面や議論する場面なども取り入れます。外部からゲスト講師を招いて話してもらう場合もあります。今回は、それらと異なる「第3のやり方」を発想しました。それは、ゲスト講師と受講生一部が一緒になって授業を計画運営するというやり方です（**図1**）。

図1　第3の授業のやり方



ことの始まりは、仙台市太白区まちづくり推進部太白区中央市民センター主査兼社会教育主事、武田吉照（よしあき）さんが太白区の長町（区の中心となる商業地）で行う秋のイベントの企画委員を区内に住む若者（高校生、大学生、専門学校生など）を中心に募っており、多くの学生が長町に住んでいる本学生にも案内したいと連絡をもらったことです（**資料2**）。そこで、筆者は、授業1回分をそれに割いて、筆者の授業の受講生全員が「1日（90分）企画委員」体験して、実際にイベントのアイデアを考え合うのはどうか、そのほうがその後企画委委員なりたいという学生も出るのではないかと提案しました。その際、武田さんだけがその授業を行うのではなく、学生のグループにも武田さんと一緒に授業企画運営をさせてほしいとお願いしました。武田さんと学生グループが一つのチームになって、1回の授業を計画実施するということです。武田さんの

資料2　武田さんから依頼受けた企画委員募集チラシ

資料1　授業の学生コメント一部

Aさん：今回の授業では授業運営チームとして活動した。アイディア出しの際に各グループが悩んでいたり、中々話し合えていない時に、他の地域での事例や過去にはこんなアイディアが出たなどアドバイスしながら進められた。その中で学んだ事は自主性である。1回目のアイディア出しでは自発的に発言をする事ができないグループや個人作業というグループが多かった。時間が経つに連れ、「メンバーの意見聞き合った？」や「このアイディア面白いね！この人のアイディアと関連してイベントできそうじゃない?」など、個人から仲間での活動へ向けてのアドバイスを行ったことで、自発的に発言を行うようになった。後半ではほとんどアドバイスは要らなく、グループは強制されたものから自主性を持つようになった。ファシリテーションという授業の中で、自発的、自主性はかなり重要視されると思った場面だった。自発的に発言をしているグループの活動を客観視してみた時に、これがファシリテーションなのだと再確認できた点は今回の授業を企画した上で自分たちのチームを評価したい。今回は限られた時間のみであったことからアイディア出しで終わってしまったが、今後は企画として予算、時間、イベント人数、ペルソナ、協賛など具体的な内容を含んだ長町のイベントプレゼン大会を行い、大学生の視点でイベントを実行するまで進めていきたいと考えるようになった。

武田様への御礼。武田様とのミーティングで「面白く、楽しいアイディアを」とお話しされた時に長町に新しい風が流れていると感じました。まちづくりに携わる方はもっとお堅いと思っておりましたが、武田さんの柔軟な思考によって学生たちも楽しく建設的なアイデアを出すことができたと思います。今後も長町はさらに良くなると感じております。街の再開発、子供達の遊び場、更には生活しやすい環境など、4年前に一人暮らしをする為に引っ越してきた私でも感じることが多かったです。更には武田様のように学生や若者が主体的に活動できるようサポートしてくれることは、少子化の地域社会への見本になると信じます。

Bさん：今回、「長町イベントのアイデア会議」の企画・運営をしてみて学んだことがありました。それは臨機応変に対応することの大切さです。私は発表当日までの準備をしている間、当日どんな流れになるのか、自分が担当している役割はどんな動きをすればいいのか全く想像もつきませんでした。「当日は授業に参加している学生全体をまとめながら、時間までに進行を進めなければいけない」ということは非常に難易度が高いことですが、良いグループ発表にするためには必要条件でした。当日の発表は想定していた通りに進みませんでしたが、結果的にグループワークでも盛り上がり、大成功だったと思いました。進行通りにはいかなかったのに結果的に大成功になったのはなぜかと考えた時に一番の理由に思いついたのは、運営グループのみんなが臨機応変な対応をすることができていたからだと思いました。学生の数が想定よりも少なく話し合いのグループ作りがうまく作れない場面でも、人数が足りないグループに運営チームが加わり話し合いをしたり、後から来た学生をグループに誘導したり、手が空いてる運営メンバーはグループの意見の収集を手伝ったりなど、自分の仕事以上のことを各メンバーがしたことによって穴を埋めることができたのだと感じました。臨機応変に対応するということは、これから社会人になっていく上でも必ず求められる力だと思います。今回の授業では、少しばかりですがその力を身につけられた良い経験になったと感じました。

今回の発表が成功したのは運営チームの力だけでなく、武田さんに事前にしていただいた準備や、アドバイスなどが非常に力となったからだと思います。今回の授業内発表に向けての事前のご準備、アドバイス、またゲストとして本校にお越しくださり本当にありがとうございました。短い間ではありましたが、大変お世話になりました。他の授業では体験できないような経験の機会を与えてくださりありがとうございました。

了解をえて、その後、学生グループの何名かが武田さんの職場を訪問して授業の打ち合わせをし、授業当日まで何度もメールのやりとりをしながら、当日の授業を実施したのでした。

学生の充実した学びにこの授業が寄与したとしたら、それは武田さん単独でもなく、学生たちだけでもなく、武田さんの的確でわかりやすい課題提示とともに学生グループが役割分担をした、武田さんと学生グループの協働活動（チームワーク）の賜物だと思います。

とかく、教師（大人）：学生＝教える側：学ぶ側　という2つの立場に、明確に分かれる授業が、この回ではその教室内にいた人たちが一体感のある雰囲気で学び合う姿を醸し出していたように思いました。

小学校から高校まで、学校では「社会に開かれた教育課程」のもとで、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の学び方が行われています。「社会に開かれた教育課程」は、「社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために」と文部科学省は説明しています。

学校教育の最終段階となる大学での今回の授業では、太白区中央市民センター（社会）と連携・協働させていただき、「未来の創り手となる学び」を学生が得ることができたのではないかと思います。

授業において、最も「主体的な」学び方は、授業そのものの運営を学生が担うことかもしれません。

これを大人が学ぶ生涯学習講座で考えてみると、講師と受講生グループがチームになって講座を運営実施するような姿になるでしょう。もし、このスタイルが学習者の学びの充実を深めるとすると、授業担当者（筆者）や講座担当者の役割は何なのか？　ということに思い至ります。

この授業は、今年度から新規に開講したファシリテーション論の授業です。1回目の授業で、この授業では実際に授業中にファシリテーション（物事をうまく進めていくこと）を学生自身も当事者として体験し学び深めていくやり方にしていくことを伝えました。15回全体の大きな展開は、ホップ・ステップ・ジャンプの3段階で構成しました（**図2**）。まず、ファシリテーションの基礎と「等話（とうわ）」の会話法を学び、ペアで話し合いをうまく進めて考えたアイデアをプレゼンする（ホップ）。次に、筆者（教員）が1回の授業の枠組を作って自治体の首長をゲスト講師に招き、その枠組みの中の一部分を学生グループが役場担当者と事前打ち合わせをしながら進行する（2回、ステップ）。その後、外部のゲストと学生グループが協働して1回分の授業すべてを企画実施する（2回、ジャンプ）。今回の授業は、ジャンプ1回目でした。翌週2回目は、白石市市民大学の受講生（シニア世代中心）の方々が来校して学生とグループ交流する授業を白石市生涯学習課担当者と学生運営グループが協働実践しました。**資料3**は、このホップ・ステップ・ジャンプの3段階展開の授業全体の学習成果の学生コメント一部です。このファシリテーション論の授業は、次年度さらに新たな「発想！」を試みていきたいと思います。読者皆様との連携・協働もぜひお願いしたいところです（現在はオンラインでもいろいろな交流できますね）。

図2　授業（ファシリテーション論）全体の展開図

ホップ	ステップ	ジャンプ
ペアで物事を進めていく体験をする。（アイデアをプレゼンする。）	グループで役割を決めて、授業の部分を外部者と計画運営する。	グループで役割を決めて、授業の全体を外部者と計画運営する。

資料3　授業全を通した学生コメント一部

Cさん：今学期のファシリテーション論の授業を振り返ると、「授業」というより、私たち生徒自身で作り上げる時間だったような気がします。ペアとの平等な会話、発表をはじめとしたコミュニケーションから、小規模グループでの企画など今までの授業とは一味違いました。その中でも、私が担当した白石市民大学さんとの昼活の企画では、どのような時間配分でどういう内容にすれば良いか、とお互いが楽しめるものにするためにグループで案を出し、調整を繰り返しました。担当を分けながら、全て自分たちで仕切って運営しました。初めての取り組みだったため、本当に上手くいくのか、スムーズに進むのかと不安でしたが、互いに意見し合い、連絡し合いながら計画できたおかげで、昼活はとても満足のいくものになりました。
ファシリテーション論では、人と関わり合い、平等を意識した会話で物事をよりよく進行するために動くことはいかに難しく、また、楽しいものであると学ぶことが出来ました。ファシリテーション論で得た力や物事の考えた方は、社会で必ず役に立つと感じました。このような実践から学び得たものを、ここで終わらせてしまうのではなく、今後の普段の生活や、他講義でのグループワークに活用させていきたいと考えています。

Dさん：ファシリテーション論の授業では、ホップ・ステップ・ジャンプの3段階の実践を経て、自分自身の成長や改善点を見つけることができました。
2人ペアでのホップは、平等な関係を前提とした相手との対話を通して、自身と相手のアイデアを引き出す方法を考えなければならない他、自分がどのように会話しているのかを客観的に理解する良い機会であったと考えます。ペアワークを通して、相手の意見を尊重し、対等な立場で意見を交換することは、相手との良好な関係を気づくだけでなく、自分自身をさらにステップアップさせるものだと学びました。
ステップでは、数名～10名ほどの小グループで役割を分担し、物事をよりよく進める練習を行いました。私はリーダーとしての役割を担ったことで責任感が養われ、メンバーとはどのように接すれば円滑なコミュニケーションができ、朝ごはんの重要性というプロジェクトをより順調に進行することができるかを考える機会が得られたと思います。役割分担をそれぞれの適正に合わせて行うことや、たった一人に必要な情報でも全体で共有し、グループの全体像を構築する術を学びました。
ジャンプでは、長町駅前でのイベント計画など、担当者の方とともに自分たちが主体になって全体を仕切り運営する授業を行いました。長町イベント、白石市との交流活動を通じて、私はリーダーであるとともに、意見をまとめる自主性やリーダーシップを発揮することが求められました。この過程で、企画の実現可能性にだけ目を向けるのではなく、どうやったら実現できるかに焦点を置き議論することで、より多様な意見を捻出することが可能になると気づきました。できるできないで物事を考えれば、頭の中で思案するだけになってしまうことになります。グループで企画するのだから、その性質を活かし、自身の意見を共有し、その実現可能性やどうやったら実現できるかは他のメンバーで考えればよいと気づきました。そうすれば誰もが議論に参加できる余地があり、誰一人孤独にすることなく企画を考えることができると考えます。

今回の授業で学生をうまくサポートくださった武田さんからも以下のコメントいただきました。

「はじめに松田先生から授業のお誘いをいただいた時、『90分間、どのように展開していけばよいだろう…？』と悩みました。ところが学生グループと共に授業をファシリテートするという内容と聞き、学生が主体性をもって取り組める点に大変共感できました。当日は私自身も、学生グループとのやり取りを楽しみながら、共に授業を作ることができました。松田先生のおっしゃるように、授業は、ファシリテーターと各グループの学生と大人（教授・外部講師）がフラットな目線で進められ、会場全体に和やかな雰囲気や一体感が感じられました。今回のケースのように、大人の働きかけによって社会と若者の接点を生み出し、何かを創造する機会を設けていくことは、若者にとっても、地域・社会においても大変意義のある取組みだと感じました。今後も、次世代を担う人材育成のためのクリエイティブな試みに積極的にチャレンジしていきたいと思います。」

今回の体験授業後、実際に太白区中央市民センターでの企画委員の会議に参加した学生も出たそうです。所属を超えて様々な高校と大学などから集まった若者たちが、どのように主体的に対話を重ねてアイデアを出し合い、企画を練って、今年度の「長町秋のフェスティバル」が実施されたのか、その実践を通してどのような深い学び（学校では得ることができないかもしれない学び、すなわち社会教育ならではの学び）を得たのか、後ほど武田さんからお聞きしたいものです。読者皆さんも聞きたいと思いませんか？

（まつだ・みちお　若者が地域社会を舞台に主体的・対話的な深い学びを得ようとする活動応援します！）
学院大学教授（宮城県）
連絡先：
（m_matsuda@shokei.ac.jp）